



集落にお店があるということ

「牛乳足りない！」「暑いなあ。アイス食べたい！」  
そんな時、どこに買い物に行くだろうか？きつと多くの方が最寄りの「コンビニ」や「スーパー」と答えるだろう。しかし、最上町の赤倉や月楯などでは、「マルコメに行こう！」「あべみせに行こう！」となるのだ。

どちらの店も、各集落の商店としては最後の1軒（土産屋を除く）になってしまった。昭和時代には肉屋や魚屋、八百屋などが軒を連ね、商店街として成り立っていたものの、平成に入り大型店の進出や旅館の廃業などを機に次々と閉店してしまったようだ。

今回取材させていただいた「マルコメ商店」と「あべみせ」は、時代の波に飲まれずに今もあり続けている。

売上が十分あるとは言えないが、それでも開けているのは「無いと困る人がいる」から。車を持たない高齢者にとって、近所に店があるということとは、とても助かるし、人と話す機会にもなっている。

私もマルコメ商店の近所に住んでいるので、たまに買い物に行くとおばあちゃんたちがレジの周りの椅子に腰掛けて世間話に花を咲かせている風景をよく見かける。

初めて訪れたあべみせの阿部さんも、全身緑色でマスクをしている不審な私を笑顔で迎え入れてくれて、店のことから最近の子育てについてまで、色んなお話を聞かせてくれた。

常連さんたちは2人と話すのが楽しみで来ているのだと想像できる。2人ともチャームリングで、人を惹きつける魅力があるのだ。

大型店が進出してきたことで、生活は便利になり、今ではそれが当たり前になった。大型店を否定する訳ではなく、昔から続いてきたお店には役割があるはずだ。例えば電気屋さんであれば、少し高くても丁寧な設置やメンテナンスをしてくれるだろうし、お肉屋さんにはスーパーには置いていないこだわりのものが並んでいる。何より、小さなお店はお客様の好みや必要なものを把握しているので、無駄がないように見えるのだ。品数は少なくてもツボをついている。以前レモンは無いだろうな〜と思いつつ、どうしても必要でマルコメさんに買いに行ったら、ちゃんと置いてあったのには感動したものだ。

そして、お店は常に町を見つめている。「小学校が閉校してから子どもたちの姿を見なくなった」と少し寂しそうだった。田舎ならではの人の関わり合いから学ぶことはたくさんある。商店ではお金の使い方だって学べるだろう。私も小学生の頃、駄菓子屋でお菓子を買うのが楽しみだったし、買い物を通して大人の世界に出入りするような感覚があった。

この2軒以外にも、最上町は小さなお店が頑張っていて、地域のつながりを作る場所となっている。便利や安さだけのスケールではなく、そのお店を利用する意味をふと立ち止まって考えてみたい。本当に大切なものを守り続けていくために。

編集・最上町地域おこし協力隊 山崎香菜子

情報提供や山崎とお話したい方はご連絡ください

電話080-3256-1134

メール hayakawamiyage@gmail.com

